

慢性痛  
急性痛

香曾我部義則先生の今月のカルテ

vol.80

# ペインクリニックの現場から

梶木病院麻酔科・ペインクリニック科の香曾我部義則先生と藤井洋泉先生が、痛みの治療や緩和についての情報を届けてくれる「ペインクリニックの現場から」。今回から3回に渡り、香曾我部先生がヘルニアが起るメカニズムや治療について話をしてくれま



■プロフィール こうそがべ・よしのり  
昭和54年に岡山大学医学部卒業後、同大学麻酔科・蘇生科講師、岡山労災病院麻酔科第一部長に。平成16年から現職。日本麻酔学会指導医。日本ペインクリニック学会認定医。現在日本麻酔学会、日本ペインクリニック学会、日本慢性疼痛学会、国際疼痛学会などに所属

椎間板(ついかんばん)とは椎体と椎体をつなぐ線維輪と中心のセラチン塊である髄核とで構成されたものです。ヘルニアとは図2のように外側の線維輪が破たんし、髄核が突出している状態を指し、脱出したヘルニアの形状は4つに分類されます。脱出する部位により、外側の線維性部分である正中型、傍正中型、外側型に分けられ、正中型と傍正中型は脊髄管側に、外側型は脊髄管外から椎間孔に出ます。

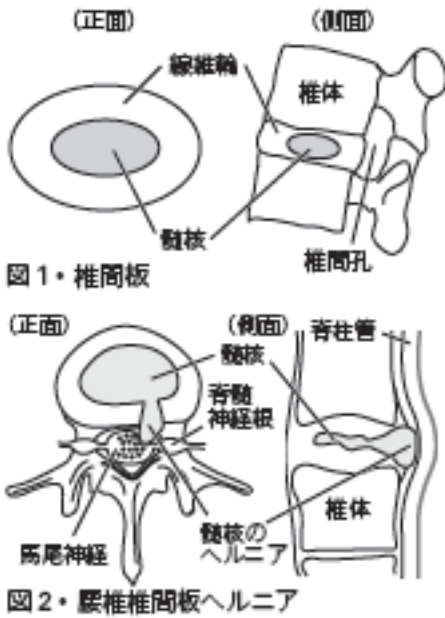


図1・椎間板

図2・腰椎椎間板ヘルニア

し、脱出したヘルニアの形状は4つに分類されます。脱出する部位により、外側の線維性部分である正中型、傍正中型、外側型に分けられ、正中型と傍正中型は脊髄管側に、外側型は脊髄管外から椎間孔に出ます。

腰椎椎間板ヘルニアは、20〜30歳代の軽作業(事務、運転、家事など)をする人に多く見られ、年齢が高くなると椎間板の変性が進行し、椎間板の内圧が低下するため起こりにくくなります。主な原因に労働と喫煙が挙げられますが、最近では遺伝的要因も示唆されており、若年者のヘルニアにその傾向が強いようです。ヘルニアは自然に縮小・消失することもあり、遊離脱出したヘルニアは縮小しやすいタイプです。ヘルニアは痛いと思われがちですが、ヘルニアがあっても痛みもみられも起らないこともしばしばです。正常なるため神経症状が出やすいため神経症状が出やすくなります。

次回ヘルニアの診断法と治療方法について説明しましょう。  
この欄のお答えは、梶木病院(北区西花尻)の香曾我部先生です。☎086(2023)6666

20〜30歳代の軽作業者に多いヘルニア。最近では遺伝的要因も痛みの原因は、炎症による神経過敏から起こる神経痛